

斎藤茂吉と青山脳病院院長（1）

—昭和2年から昭和3年まで—

小泉 博明

日本大学大学院総合社会情報研究科

Mokichi Saito and the Director of Aoyama Psychiatric Hospital (1)

—From 1927 to 1928—

KOIZUMI Hiroaki

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Mokichi Saito (1882-1953) took over his stepfather Kiichi's role as the director of The Aoyama Psychiatric Hospital on April 25, 1927. He made improvements to the hospital that resulted in reducing the number of patient deaths and escaped patients. However, the number of escaped patients remained so high that he was warned by police to find a solution. One of the hospital's patients and a personal friend of Mokichi was Ryunosuke Akutagawa (1892-1927). The suicide of Akutagawa on July 24, 1927 gave him a great shock. Stepfather Kiichi died on November 17, 1928. Thereafter, Mokichi faithfully tended to patients as a clinician and tried his best to run the hospital as the director.

1. はじめに

斎藤茂吉は、1927（昭和2）年4月27日に、創設者である養父紀一に代わり青山脳病院院長に就任した。警視庁から、茂吉へ院長の指令が出された。

指令第一二七六〇号

赤坂区青山南町五丁目八十一番地 斎藤茂吉
昭和二年四月十二日願私立精神病院青山脳病院
ノ業務継承ノ件認可ス、昭和二年四月廿七日
警視総監宮田光雄 警視総監之印¹

病院の運営は、副院長には青木義作、薬局長には守屋誠二郎など、斎藤家に縁故ある人々で構成された。事務長に当たる院代には、板坂亀尾が、引き続き担当した。そして、警視庁より院長へ、公安を保持する上で、病者の逃走、放火未遂と器物破損などの、院長更迭の要因となった頻発した事故への改善を強く要求されたのであった。院長に就任後の茂吉の動静を見ると、4月27日の日記には、次のようにいう。

2.午前中診察ニ従事スル。3.午食後直チニ自動車ニテ松原ノ本院ニ来ル。ソコデ新患ヲバー名委

託ヲ診ル。4.看護人二名ヲ選ブ 5.病室ヲ回診シテ極メテ丁寧ニ診察スル。重症患者室ニ行キテ丁寧ニ診察スル、タニ至ル。(略)廿八日午前中、精神病者ノ理髪ニ関シテ世田谷署ニ出頭スルヤウ通達アリタリ。ソレハ□□□□(四字削除)ト云フ患者ガ父ガ面会ニ来リタル際ニ投書ヲバ父ニ托シタルモノデアル。7.夕食ヲナス。非常ニ疲ル、心身綿ノ如シ。²

4月28日には、次のようにいう。

昨夜ハハジメテ本院ニトマリタリ。朝クラキヨリはたきノ音ガシテネムラズ、眠薬ノミタレドモ八時ニ起床シタリ。(略)病室ノ重症ヲ見マハル。病室ヲ巡視スル。理髪ノ件ニツイテ世田谷署ニ呼バル。ソシテ患者ニ理髪ヲサセルコトハ悪イト云フコトニナル。ソノ時ニ警視庁ヨリ僕ニ院長ノ指令ヲ渡サル。³

4月30日には、「コノゴロハ机ニ向フコトモ殆ドナク。入浴スル暇サヘナシ。」⁴と云うように、院長として忙殺されている。

茂吉にとって、病院の改善は喫緊の要事であり、

まず看護人の確保を手掛けた。とは言え、看護人の不足は他の精神病院でも同様であった。その理由は、勤務の拘束時間が長く、報酬も安く、何よりも世間で賤しい職業と見なされていた点であった。精神病患者だけではなく、そこで働く献身的な職員にまで、社会は否定的な眼差しを向けていたのである。

5月1日には、次のようにいう。

午後ニナリテ看護人志願者十数人來り、ソレヨリ六人バカリ選抜シテ本院ニオクル、(後記。ソノウチニテ居附キタルハ一人ノミナリ。アトハ無断ニテ帰ルノモアリ、コトワリテカヘルノモアリ、)⁵

なお、このような状況のなか、同日に次男の宗吉（北杜夫）が生まれた。平福百穂画伯が名付けた名前である。⁶

5月2日には、「1.警視庁ニ來リテ金子技師、松浦警部、鈴木警部補、亀岡課長、川村部長ニ挨拶スル。2.円太郎ニ乗り、世田谷署ニ行キ田村部長、加藤署長ニ挨拶(ママ)スル。(略)4.松原ノ本院ニ行キテ、重症患者ヲ手当スル。ソノ骨折ハナカナカナレドモ、コレヲ功德トモ思ハズ。5.夜ノ九時頃カヘリ渋谷ニテ麦酒ヲノミ、カヘリ、今夜ハ眠剤ヲ飲マズ。ヨクネムレズ。」⁷とある。院長に就任し、茂吉にとって不馴れな警視庁と世田谷署の精神病院の担当者への挨拶を、不器用にこなしたのであった。金子技師とは金子準二のことである。⁸また、同日に内務省から次の指令が出されたと、日記にある。院長は茂吉であるが、経営者は引き続き紀一となっている。

衛医丙第一〇八六号ノ一、昭和二年五月二日。代用精神病院経営者青山脳病院斎藤紀一殿、衛生部長、代用精神病院指定ノ期間更新ニ関スル件。首題ノ件ニ関シ曩ニ承諾書御提出中ノ処別紙ノ通指令相成候ニ就テハ平素病者ノ保護治療及其他ノ施設ニ関シ相当御考慮相成居候コトト被認候モ近時逃走其ノ他ノ事故頻発シタルモノアルハ公安保持上、寔ニ寒心堪ヘザル次第ニ有之候ニ就テハ今後一層諸般ノ点ニ留意シ病者ノ看護並治療上萬遺憾ナキヲ期セラレ度(別紙)(東京府、昭和2.4.13.卯、宿直ノ印)内務省發衛第三八号、東京府荏原郡松澤村松原三百番地青山脳病院経営者斎藤紀一 大正十五年六月十

六日附内務省視衛第二九〇号指令其ノ病院東京府代用精神病院指定期間ヲ更新シ昭和三年三月十一日迄延長ス、昭和二年三月三十一日 内務大臣濱口雄幸 内務大臣之印⁹

当時の衛生行政は内務省(厚生省は昭和13年に成立)であり、青山脳病院は東京府下の病院であるので、警視庁そして所轄の世田谷署が監督し、指導していたのである。「逃走其ノ他ノ事故頻発シタルモノアルハ公安保持上」とあるように、安寧秩序という公安を保持する事が肝要なのであり、患者の治療や、まして患者の人権についての配慮はない。5月3日には、「病院ノ改革ガ一大事ニシテ心ニ寸隙ナク。コレニテハ心身ガ疲労スルバカリナリ。」¹⁰という。

茂吉は院長となったが、養父紀一が健在で経営者として、また臨床医として厳然と存在しているだけに、何かと紀一と比較され、批判されるという苦悩を抱え、内憂外患とも言うべき、その労苦にさらなる重圧が加えられたのである。松原の本院には、紀一に妻の勝子、弟の西洋や米国、さらに板坂という長年にわたり紀一に仕えた院代が居たのである。

2. 患者の死亡数

患者の死亡数が多いことも、茂吉を悩ませた。5月4日には、次のようにいう。

午前中青山ニテ診察シ、午後直チニ松原ノ本院ニ行ク。直チニ重症室ニ行キタルニ既ニ危篤ノ者二名アリ。又褥瘡ノアルモノヲ見出シテソレヲ手術シテイルウチニスデニ危篤ニ陥ル。ドウモ氣ガエラエラシテ困リタリ。夜モ回診シテキルウチニ一名死亡ス。重症患者ノ所置(ママ)ニツイテ種々協議スル。斎藤ト云フ患者ガ逃走ヲ企ツ。夜ハ眠薬ヲ飲ミテ寐タレドモヨク眠ラレズ。蛙ノ声シキリニキコユ。看護人ハ募集シテ一日キテ帰ル者、居ツカナイモノ多シト云フ。¹¹

重症室へ行くと、二人が危篤状態であるとか、褥瘡を見つけて手術している内に危篤に陥るとか、精神病院の現実が語られている。「氣ガエラエラ」とは、「氣が苛々する」という意味であろうが、茂吉がよく使用する表現である。

5月5日には、「昨夜ハ本院ニ泊リテ安眠出来ズ。朝、麻痺性痴呆ノ患者二人死ス。昨夜以来三人死亡

ス、気ガエラエラシテ心身疲ル、ソノウチ茨城県ノ患者一人外来ニ来る、診察シテ、投薬ス、一名ノ自費入院アリ。」¹²この日も麻痺性痴呆の患者が死亡し、「気ガエラエラ」しているとある。5月7日には、「昨夜本院ニテ患者二名没ス。」¹³とあり連日、患者の死亡である。5月8日には「今日ハ信濃富士見ニテ左千夫忌、赤彦忌歌会アル筈ナレドモ僕ハ出席スルコトヲ得ズ。徒ラニ病院ノコトニツイテ苦慮ス。午後思ヒ切ッテ本院ニ行き、重症患者ノ手当ヲナス。重篤ノモノ数名アリ。」¹⁴とある。茂吉は、師伊藤左千夫、歌友島木赤彦の歌会に参加できないほど、連日にわたり患者の対応に明け暮れている。

5月9日には、次のようにいう。

本院ノ患者ニツイテ考ヘテキタル時ニ菅井周平氏来リテ本所ニ往診ヲ頼ム。ソノウチ警視庁ヨリ電話ガカカリテ印ヲ持チテ来テ貰ヒタシト云フ。明日デイカヌカト云ヘバ今日来テ貰ヒタイト云フ。午後一時半頃自動車ニテ警視庁ニ行きソノ足シテ本所ニ往診ス。脳溢血ノ疑ナリシモ大シタルコトナシ。警視庁デハ「願」ノ代リニ「申請」ノ文字ニ直シタルナリキ。(略) 本院ニテ患者死亡スル。¹⁵

どのような「願」を「申請」にしたか不詳であるが、院長たる者は、警視庁の呼び出しには、直ちに印鑑を持参し、出頭せざるをえない状況が分かる。警視庁に睨まれているだけに、茂吉は当然ながら律儀に出頭するのである。精神病院が、いかに警察(お上)の顔色をうかがっているかの一例である。

5月11日には、次のようにいう。

午後本院ニ来リ、丁寧親切ニ代用患者ヲ診察スル。死スル者ハ殆ド死シテ、重篤ノ者アト二三名トナリタリ。自費ノ方ニモ重症二三名アリ。¹⁶さらに、5月18日の日記には次のようにある。

午前中診察ニ従事シ、午後本院ニ行き、イロイロ事務ノ事、患者ノコトヲ処理スル。父上モ居リテイロイロト話ヲスル、「オ前ガイロイロ心配スルモノダカラオトッサンハ楽天的ノコトヲ云フ」ト云フ。実際僕ハ心配バカリシテキル。(略) 今月ノ死亡患者ハ先月ヨリモ多クナリタリ。非常ニ熱心ニ従事シテキルニ斯克ノ如クナルハ大ニ考慮セザルベカラズト思フ。¹⁷

5月19日には、次のようにいう。

本院ニ昨夜トマリ、患者ニコトヲ種々世話スル。ソノウチニ青木君モ来ル。治療ノコトヲ種々相談スル。夕方ニ青木君ト一ショニ帰宅シ、渋谷ノ停車場ノ処ニテ麦酒ヲ飲ム。廊下ノ光トリノ処ヲバ抜キテ風気通ズル必要。患者ノ疥癬ヲバ薬湯ニ入レル件、重症患者ヲバ移シテ特別ニ看護スル件。沃度加里等ヲ Paralyse ニ飲マセル件。¹⁸

ここには備忘録的に、病院の改善の要点をまとめている。裏返せば病院の現況が、このように不十分な状況なのである。

5月20日には、次のようにいう。

午前中診察ニ従事ス。ナカナカ多忙ナリ。夕方ヨリ本院ノ板坂。鈴木。角田。草野四君ヲ四谷見付ノ「松喜」ニ請待シテ夕餐ヲ共ニス。今日ノ午前ニ医師一名来リ、月給百円ニテ大体キメル、新潟医専出身ナリ。来週ノ水曜日午後ニ本院ニ来ルコトヲ約束スル。¹⁹

5月22日には、「男ノ患者一人死亡ス。大ニ心痛ス。」²⁰とある。その後、6月29日には、次のようにいう。

午食後ニ自動車迎ヒニ来ル。ソレヨリ本院ニ行く。患者ノ死亡者ハ本月ハ23名ナリ。浮腫アルモノ多シ。ソレガナカナカトレズ。喚起ノコト。便所ノコト。脚気ノコトナドニツイテ大ニ氣ヲ使フ。²¹

「浮腫アルモノ」が多いのは脚気が病因と考えられる。そこで、脚気の対策については、1927(昭和2)年12月31日の日記で、艱難辛苦の一年を振り返るなかで「糠エキスヲ作ル」「米モ半搗キ米」にするように、茂吉は院長として改善策を講じている。岡田靖雄は「当時精神病院での死亡原因中、脚気が第二位、第三位にあった。白米と脚気の関係は1919年にはあきらかになっていた。しかし、京都の岩倉病院で1919年半搗き米をつかいだしたときには、患者および家族は経費削減策と誤解して抵抗があった。」²²という。東京府松沢病院では、1926年から半搗き米を使用し、翌年から脚気発生が減少したとある。この件については、茂吉は院長としての責務を果たしたといえよう。

9月21日の日記には、「自動車ニテ本院ニ来リ、診察ニ従事スル。死亡スル患者未ダ減ゼズ。スデニ十七名ナリ。非常ニ骨折ツテキルノデアルガ、イマダ落付カヌモノト見ユルナリ。」²³と、9月28日には、「死亡患者ハ今日マデスデニ21名ナリ。薬湯二日休ミタリト云フガ監督セザレバ駄目ナリ。」²⁴とある。9月29日には、「午前中本院ニアリテ患者ヲ診察シ、イロイロ相談スルトココアリ。薬湯ヲ立テ、皮膚病患者ヲ入レシム。」²⁵とある。

患者の死亡数であるが、6月は23名（30日死亡記事なし）、9月は21名（29日、30日死亡記事なし）となり、1か月の患者の死亡数は数字の上では微減している。とは言え10月12日には、「午後大イソギデ自動車ニテ本院ニ行ク。死亡者スデニ6名ニナリ居リタリ」²⁶とあり、思うようには減っていない。薬湯を二日間休んで、死亡者が増えているようであり、病院の衛生環境が懸念される。青山脳病院の300余名の入院患者に対して、このように1月に20名ほどの患者が死亡するとは、驚愕の数字であるが、これが当時の精神病院では現実なのであり、警視庁の金子技師が「コレモドウモ新シキ病院ニテハ仕方ナシ」²⁷と言っている。

茂吉は、患者の死を次のように歌う。

ものぐるひの命終るをみとめ来てあはれ久しぶりに珈琲を飲む

（『ともしび』昭和2年「童馬山房折々」）

3. 患者の逃走

院長就任後、茂吉が最も危惧していた、患者の逃走事故が惹起した。患者の逃走は、精神病院外の住民に対し、安寧秩序を揺るがす一大事なのである。内務省や警視庁には、患者の人権への考慮は全くない。6月18日の日記に、次のようにいう。

診察ニ従事スル。十一時頃ヨリ稍忙シクナリタリ。(略) 女ノ患者(緊張病)一人ガ夕食ノ時カ、風呂ノ時カニ外出シテ見ツカラナイ、ソレヲバ届出ルヤウニ決心シテ土屋君ト外出シタ。気ガエラエラシタ。²⁸

ここでも、「気ガエラエラ」とある。茂吉は分院での診察が昼過ぎまでかかった。その後、本院から患者の逃亡の知らせが届いた。前日の夕食後に、患者

は逃亡し、その後に捜索したが、見つからないのであった。直ぐに警察へ届けるべきであったが逡巡し、翌日に届けること決心をしたのであった。警察は、直ぐに届けがなかった事を叱責したであろうが、それでも茂吉院長となり、改善されつつあるという心証を持ったのであった。

7月15日にも逃走事故があった。日記には、次のようにある。

青木君診察。本院ニ来ル。□□□□□(五字削除)、□□□□(四字削除)、ガ安静室ワキノ非常口ヨリ外出セリトノコトニヨリ。届書ヲ書キテ板坂氏ガ世田谷署ニ行ク。蒸暑クシテ午食モ出来ザル程也。患者ノ外出セルコトニツイテハ誰カ補助シタルモノナキヤノ疑モアリ。午後三時半世田谷署ノ刑事巡查調査ニ来ル。(略)

○病院に来て吾の心は苦しめどこの苦しみは人に知らゆな

○なにがしか心ぐるしくおもほゆるこの日ざかりに蝉なくきこゆ。かゝる日にこのあつき日ざかりにやすらはむ

○むらぎもの心のどかに山越えて鳥がねきかむ人もあるべし

○この世にし苦しむことはしげけれど事空しかりとわれ思はざらむ²⁹

日記に、このような茂吉の心奥を吐露した歌がある。7月16日には、次のようにある。

診察ニ従事スル。今日ハ善イ日ナリテ二人患者退院スル。外来モ少ナシ。午後ハ汗ヲナガシナガラ本院ニ行キテ逃走患者ノコトヲ相談スル。今日ハナルベク病室ニ行カナイヤウニシタリ。看護部長交(ママ)テツノコトニツイテ相談スル。精神病院ノ経営ハ実行実ニムヅカシイ。夜ニナリテ青山ニ帰ル。ネムリグスリヲノム。³⁰

病院経営の困難さ嘆いているが、7月18日には、逃走した患者の一人が保護され、茂吉の安堵はいかばかりかと思う。また、逃亡には看護人の関与が疑われ、更迭となったようである。

午前中警視庁ニ行カントシタルニ、逃走患者ガ一名(□□□□□)(五字削除)見ツカリタルコトヲキ、及ビ、本院ニ行ク。アマリ暑イノデ困ツタ。板坂ハ自動車ニテ寺島署ニ患者ヲ迎ヘニ

御礼カタガタニ行ク。アトハ便所ノ新築ノ監督、廊下ノ監督等ヲナス。夜ニナリテ患者二人、看護人等ヲ取調べル。午後十時十分マデ本院ニ居リカヘル。一寸入浴シテネムリグスリヲ飲ミテネムル。³¹

7月19日には「人生ハ苦界ユエ、僕ハ苦シミ抜カウト思フ。毎夜、睡眠薬ノンデモカマハヌ。正シキ道ヲ踏ンデ行キツクトコロマデ行キツカウ。」³²とまで、院長としての責任と覚悟がうかがわれる。

4. 警察の呼び出し

7月20日に、警視庁より院長の茂吉へ出頭要請があった。当日の日記には、次のようにいう。

午前中診察ニ従事スル。患者少ナシ。ソノ時ニ本院ノ院代ヨリ警視庁ノ鈴木警部補ヨリ作業患者ニ就イテノ調査アル故ニ午前中ニ出頭セヨトノコトニテ出頭セリ。(略)十一時二十分前ニ出頭セリ。恰モ金子技師ノ処ニ氏家信君ガ居リテ、二人シテ一足先キニ警視庁ヲ出デ(略)圓太郎自動車ニテ青山脳病院ニ来リタルニ患者一人待リ居リ、且ツ院代ガ届書(作業ニ関シテ)作製シ居リタリ。ソレヨリソノ届書ヲ持チテニタビ警視庁ニ出頭シ、松浦警部トモアフ、(略)松浦警部専三郎氏ハ、僕ノ病院ノ作業ノ「金券ハヤメテ貰ヒタイデスナ」「アナタノ処ノ口賃ハ二割デスガ一割七分ノ処モアリ、三割、五割ノトコロモアリマチマチデスカラ一度朝ノ冷シイ時ニ院長諸君ニ来テイタバイテ相談シタイト思ヒマス」云々。³³

これは、病院で患者がしている内職的作業(主として袋貼り)の工賃から、病院で引いている手数料が各病院で不統一であるので、院長が集まり相談して統一せよという要請である。

7月25日の日記には、次のようにいう。

朝ハヤク起キテ警視庁ニ出頭スル。戸山ノ杉村幹。僕。加命堂ノ奈良林。井村の井村。小峰。松村。保養院ノ池田ノ順序ナリ。松浦警部。金子技師ヨリ訓示アリタリ。謹ンデ聴ク。ソレヨリ明後夜ニ燕楽軒ニテ会合スル予定ニテワカル、(略)特ニ夕刊ニハ「精神病院長ノ召喚」ナド、云ヒテ尽クノ新聞ニ出デ。アレハ人心ヲ悪クス

ルコト多大也。³⁴

そして、翌日の燕楽軒³⁵で行われた代用精神病院長会議で、「決議ノ結果2割5分ヲ工賃ノ中ヨリ引クコト、シタリ」³⁶となった。そして、7月27日の日記には次のようにいう。

警視庁ニ出頭シ、亀岡課長。金子技師。松浦警部ニ会ヒ、昨夜ノ院長決議ヲ報告ス。(略)○ドウモ投書ナドアルノハ保養院、根岸、戸山、青山アタリガ多イ。コレハ何か欠点ガアルノデハナカラウカ、云々。○青山病院ノ看護人ノ日給ハ安イカラ交代ハゲシイ、云々、根岸ハ30円カラ六円ノ食費ヲ引キ六ヶ月ハツミ立テサセル、ソレヲ守ラザレバ返サナイ云々。○昨夜ノ決議ハ元(ママ)富士署ノ刑事ヲシテ探知セシメ、何デモ分カツテ居リマス「警視庁ト云フトコロハドウデス偉イデセウ」云々、(略)東京日々ニ三院長ノコトガ出テキタリ。³⁷

茂吉ら3名の院長が7病院を代表して出頭したのである。そして、驚くべき事には、昨夜の院長会議の模様を刑事が探索していたのである。なお、7月26日『東京日々新聞』夕刊では次のように報道している。

精神病院長七名を取調べ／警視庁の投書から／池田、小峰博士等を召喚
警視庁医務課衛生課では最近管下における各精神病院の内容についていろいろの投書あり内債中であつたが廿五日は午前九時保養院長医博池田隆徳、王子病院長小峰茂之、根岸病院長府会議員松村清吾、戸山脳病院主杉本寛、加命堂主奈良林眞、幡ヶ谷井村精神病院長井村忠太郎、青山脳病院長斎藤茂吉氏等七等を召喚している聴取してゐる、内容は患者に対する待遇、内職賃銀の処置についてである。³⁸

7月28日の、夕刊には次のようにある。

今後の改善事項につきいろいろ協議を重ねた結果最初警視庁から提出された
一、入院患者の内職作業工賃の七割五分を患者に与へること
二、金銭の収支を明らかにすること
三、帳簿を作製すること
四、患者の待遇を改善すること

等以下七ヶ条は全部これを承認すると同時に使用人に対しても監督を厳重にし患者を優遇することを決し青山斎藤、王子小峰、加命堂奈良林三氏は七病院を代表して廿七日午前九時衛生部へ出頭諒解を求めて引き取った。³⁹

さらに、12月になると別件で、院長の茂吉が警察に出頭することに事になった。12月13日には、次のようにいう。

板坂亀尾君ガ来テ、実ハ一昨日警視庁ノ辰巳警部ガ普新（ママ）ノ見聞（ママ）ニ来テ、許可ガナイノニモ一建テシマッタノデ怒ツタガ、トニカク大目ニ見ルト云フノデ帰ラレタガ、今日角田事務員ガ警視庁ニ行クト、松浦警部ガ大怒リデ、タバデハスマサヌ。罰金カ拘留ニ処スル。第一明朝始末書ヲ以テ警視庁ニ院長自身出頭セヨト云フコトデアッタ。ソレカラ世田ケ谷署ニモ院長（僕）ガ出頭スペント云フコトデアッタ。僕ハ歌ヲ作ラネバナラズ、文章モ書カネバナラヌ。気ガイライラシテキル処ニコノ始末ダカラ、今夜ハ旨クネムレナカッタ。⁴⁰

これは、12月11日に警視庁辰巳警部が普請の見分に来院し、許可がないのに建築したことへの叱責である。岡田靖雄は、「僕ハ歌ヲ作ラネバナラズ、文章モ書カネバナラヌ。気ガイライラシテキル処ニコノ始末ダカラ、今夜ハ旨クネムレナカッタ。」に対して、「どうも、医業より歌作りこそが自分の使命だとかんがえていたようである。」⁴¹とし、医者としての茂吉を批判している。果たして、この批判的を射ているだろうか。新米の院長として激務で忙殺されるなかで、作歌が茂吉にとっての心安らぐ慰めである。心身共に疲労困憊し作歌すら出来なかったのである。茂吉の心痛を察して欲しいものである。そして、12月14日の日記には次のようにいう。

朝八時ニ起キテ、食事シ、角田事務員ノ来ルヲ待チテ警視庁ニ行ク。辰巳警部ハ案外オトナシク、兎ニ角願書ヲ訂正セヨトイフノデ机マデ貸シテ呉レタカラ、ソコデ訂正ヲシタ。（ソレニ一時間モカカツタ）、松浦警部ニモ会ツタ。罰金グラキデハスマサレント云フ。丁度金子技師トモアフ。（略）世田谷署ニ来リ、聴取書。始末書。調査書等約二時間カカル。ソレヨリ本院ニ行き、

患者ヲ診察シテ八時マデ居リ、（略）帰宅ス。作歌セントシタルガツカレテ出来ズ。又眠ラントセルガヨクネムレズ。⁴²

世田谷署では、聴取書、始末書さらに調査書の作成に2時間を費やし、厳重な注意を受けた。これで、一件落ち着いたようであるが、ところが翌年1月25日になり、「世田ケ谷署ガ建築法違反ノタメニ訴告シタ」⁴³のである。翌日には「都新聞、読売新聞ニ僕ノ記事ガ乗（ママ）ツタ。」⁴⁴とある。そして、2月6日の日記には、この件に関して次のようにある。

朝早く起ル、雪大ニ降ル。十時少シ前マデニ東京区裁判所ノ清水検事ノトコロニ行ク。コレハ世田ケ谷署ヨリ建築法違反ニヨリ告発サレタルガタメデアッタガ、検事ハ同情シテクレタノデ書記ヲオカズニ一人デ検ベテクレタ。又病室ニ関係ガナイラシク、別ニ所（ママ）罰スル必要ガナイヤウニオモフガ他ノ主任ト相談スルト云ツタ。⁴⁵

これで、その後に出頭要請はなく、何とか収束したのである。なお、茂吉は病院経営に奔走し、その心情を次のように歌う。

雨かぜのはげしき夜にめぜめつつ病院のこと気にかかり居り

（『ともしび』昭和2年「葦」）

生業はいとまへさへなしものぐるひのことをぞおもふ寝てもさめても

狂院に寝つかれずして吾居れば現身のことをしまし思へり

むらがる蛙のこゑす夜ふけて狂院にねむらざる人は居りつつ

ものぐるひを守る生業のものづかれきはまりにつつ心やすけし

（『ともしび』昭和2年「雨」）

精神病者のことを直接は歌っていないが、精神科医を生業とし、ひたすら生業に、さらには病院経営に専心している姿が伝わってくる。茂吉が使う「狂院」「ものぐるひ」には差別の意識はない。

5. 茂吉と芥川龍之介

芥川龍之介は『僻見』で「近代日本の文芸は横に西洋を模倣しながら、豎には日本の上に根ざした独

自性の表現に志してゐる。茂吉はこの堅横の両面を最高度に具えた歌人である」⁴⁶と茂吉を高く評価し、賞賛した。茂吉にとって、芥川によって文壇で名声を高める機縁となったのである。そして、茂吉と芥川とは、歌人と小説家という文人としての交友だけではなく、神経衰弱に悩む芥川に睡眠薬を投薬した医者と病者という関係へと展開していったのであった。茂吉が芥川に出会ったのは、長崎医学専門学校教授として赴任中のことである。⁴⁷芥川と菊池寛が1919（大正8）年5月7日から12日の間、長崎へ南蛮キリシタンの調査旅行に来た。茂吉は、随筆の『芥川氏』で次のようにいう。

私が長崎に行つてゐた時である。或る日の晝過ぎに県立病院の精神科部長室にぼんやりしてゐると、そこに芥川龍之介さんと菊池寛さんのお二人がたづねて来られた。これは私にも非常におもひまうけぬ事で、お二人とも文壇の新進としてもはや誰も知らぬ者も無いといふ程であつたから、私の助手や看護婦なんかが、物めづらしさうにお二人を盗見したり、私もあわてて紅茶か何かを持ってくることを看護婦に命じたりしたことを今も想起することができる。（略）その時私ははじめて芥川さんも菊池さんも見たのであつた。⁴⁸

その後、大正15年5月8日付の芥川宛の書簡では、芥川の神経衰弱について次のようにいう。

謹啓御体の方はかばかしく無之よし一番困り候事と存上げ候。神経衰弱の方は少々気長に静養大切と存上げ候ゆゑ、臭剤等は時々廃める事もよろしく、又催眠剤の連用もあまり過ぐるのは悪いと存じ候。その間に物理的療法（転地、温泉、風呂、散歩など）をも試み、何しろ旨い物を体の中に入れる必要有之候。神経衰弱よくなれば胃の方もよくなり候へども、一時神経衰弱の方の薬を止めて、胃の薬のむ事もやはり神経衰弱の療法と相成候事有之それから、御為事少しづゝなされ候ともよろしからんと存じあげ候。（略）御來客の多過ぎる事これだけはどうもわるく御座候右少々医者めきて工合わるけれども御参考下されたく、何向き一日も早くもつと御肥り下さらずにては小生も困却罷在候。⁴⁹

さらに、同年6月6日付の芥川宛の書簡では、神経衰弱の具体的な療法について記している。

胃弱の方も神経衰弱の方も慢性のものと承知いたし候ゆゑ、何卒御自愛下されたく。前言も小供だましのやうにて恐縮なれども総じて医者は左様に申すものに有之、病者は小供になつた頂かねば直らぬものに有之、右の原理何卒御ふくみ願上候 一、胃の薬のみ、煙草は少し肥る事かん要也 一、転地最もよし、俗人の面会沢山はわろし、面会日極め、いゝ加減に相對する事肝要なり 一、神経衰弱のための臭素剤、アダリン、ウエロナール、カルチモン、ノイザール、オプタルソンのたぐひ、は今しばらく中止してもよろしく候はん。これは折々服用（乃至注射）の事⁵⁰

なお「ウエロナール」とは、バイエル社が販売した「ペロナール」のことで、不眠症のための睡眠剤である。当時の臭素剤よりも、飲みやすく改善された。但し、長期の使用により慣習化すると薬効がなくなり、薬剤を増量する傾向に陥る危険性がある。茂吉も「中止してもよろしく」と注意を喚起している。同年6月11日付、芥川から茂吉宛の書簡では、次のようにいう。

冠省。いろいろ御教誨にあづかり難有く存じます。眠り薬の方はこの頃又ものを書き候為、用ひる癖あり弱り候。日曜日にも土屋君と御一しょにお遊びにお出下さるまじく候や。近頃目のさめかかる時いろいろの友だち皆顔ばかり大きく体は豆ほどにて鎧を着たるもの大抵は笑ひながら四方八方より両眼の間へ駈け来るに少々悸え居り候。頓首⁵¹

芥川が「用いる癖あり」と言うので、常習性がうかがわれる。茂吉は、この書簡に対して同年6月16日付で、次のようにいう。

謹啓御手紙忝く拝受仕り候このごろ御為事被遊候趣実に欣賀この上なく感謝の至に御座候。御書きにならぬ時には榮養の方の御薬がよろしく候はん。そのうち參堂、妙薬も持參仕るべく候⁵² 薬剤への依存ではなく、「榮養の方の御薬」と滋養をすすめている。

昭和2年1月27日の日記には、次のようにいう。

父上診察ニ従事スル。午前中ハ看板ノペンキヲ塗ル。(略)三時頃ニ芥川氏来リタマデ話ヲナス。ドテヨリ芥川氏ニ自動車ニ乗セテ貫ヒ動坂マデ4円50銭。ソレヨリ天然自笑軒ニテ食ヲ御馳走ニナリ。十時過ギヨリ芥川氏ノ家ニ行キ十二時マデ談話ス。大ニ有益ヲオボユ。今日ハ芥川氏ニ種々頂戴シ且ツ馳走ニナリテ大ニスマヌ心地ス。十二時ニ芥川氏ノ家ヲ辞シ(略)⁵³

院長とはいえ、午前中は看板のペンキ塗りの仕事をする。午後に芥川が来訪し、その後天然自笑軒にて、茂吉は馳走になり恐縮する。天然自笑軒とは、田端にあった文人墨客や政治家が利用する当時は有名な会席料理屋であり、芥川もよく利用していた。芥川は田端駅近くの、北豊島郡滝野川町宇田端 435番地に居住していた。なお、芥川の担当医は、信州伊那谷の出身の下島勲であり、天然自笑軒の斜め向かいに下島医院があった。必ずしも茂吉が担当医ではない。

2月1日付の芥川宛の書簡では、次のようにいう。

拝啓先日は御馳走に相成り何とも感謝奉り候。今日独逸バイエル会社の「ウエロナール」届き候ゆゑ一オンス（廿五グラム）使もて御とゞけ申候。舶載品は邦製のものと同成分全く等しと申し候ひども舶載のものゝ方がやはり品よき心地いたし申候。御比較願上候。次にヌマール（Numal）といふロッシュ（Roche）会社の錠剤をも御届け申し候。これは一錠頓服にて十分と存候が、これも御試めし願上げ候。ウエロナールとヌマールと相互に御使用の方が、慣習にならずによろしく御座候（略）

追伸。薬価の事御気かけられ候事かと存じ候ゆゑ内実を申上候邦製ウエロナールは一オンス八十五銭に有之、舶載のバイエル会社のものは二円五十銭、ヌマールは一円六十銭にて、先夜の自働（ママ）車にも相成り不申候ゆゑ、進上仕りたく右悪しからず御承引願上候。但し、薬は高きものと思召にならざれば利かぬものに候ゆゑ、その御つもりにて御服用願上候 敬具⁵⁴

茂吉は、馳走になった御礼として芥川に「ウエロナール」だけではなく、「ヌマール」という薬剤と短冊を送った。2種類の薬剤を相互に服用し、慣習化

しないように指示している。茂吉の1月30日付、日記には「芥川氏に、Verona 125 gr. フトドケル」⁵⁵とあり、日記と書簡の日付に異同がある。これに対し、芥川が薬剤と短冊を受け取った2月2日夜付、茂吉への御礼の書簡がある。

冠省。御薬並びに御短尺ありがたく存じ奉り候。唯今夜も仕事を致しをり候為、朝ねを致し、(略)「河童」と云ふグアリヴァの旅行記式のもの製造中、その間に年三割と云ふ借金（姉の家の）のことも考へなければならず、困憊この事に存じ居り候。余はいづれ拜眉の上。右とりあへず御礼まで。頓首(略)二伸唯今でも時々錯覚(?)あり。今夜はヌマールを用ふべく候⁵⁶

芥川の茂吉宛の書簡3月28日付には、「この頃又透明なる歯車あまた右の目の視野に回転する事あり、或は尊台の病院の中に半生を了ることと相成るべき乎。」⁵⁷とあり、症状の悪化が危惧される。

芥川は、7月24日、田端の自宅で服毒自殺をし、社会的にも大きな衝撃を与えた。35歳であった。服毒した薬品は、ベロナールという説があるが、真相は不明である。茂吉の処方したベロナールを過剰に摂取したものかどうか断定できない。⁵⁸精神科医にとって、担当の病者の自殺は、どうしても回避できない辛い体験である。茂吉は、7月24日の日記で次のようにいう。

アララギ発行所ノ面会日ニ行ク。雨ノタメニ人数少ナシ。夕食ヲうなぎニシテ土屋。久保田健次ノ二君ト夕食ヲスマシ、談話ヲシテキルト、妻ガアワテナガラ来タノデ僕ハ何カ重大事件ガ起ツタト云フ予感ノタメニ非常ニ心悸亢進シタガ、第一ハ病院ニ何カ起ツタノデハナイカ、家族ニ変事ガアツタノデハナイカト思ツタガ、改造社ノ山本社長ヨリノ電話ニテ芥川龍之介氏ガ毒薬自殺シ、午後八時ニ納棺トノコトデアツタ。驚愕倒レンバカリニナリタレドモ怵ヘニ怵ヘ直チニ妻ヲカヘシ、土屋君ヲ下ノ部屋ニ呼びビ、一円自動車ニテ動坂下ニユキ、直グ芥川氏宅ヲタツネ。焼香シ、死骸ヲ見タ。門歯ノ黒クナツタノガ二枚出テキルコト生前ノ如クナリ。静カナル往生也。ソレヨリしるこや竹村ニ行キ、久米正雄氏、遺文ヲヨム。記者団ツメキリ。ソレ

ヨリニタビ家ニユキ、高橋敬録氏ト共ニタビ死面ヲ見ル。十一時辞シテ土屋君ト省線ニテカヘリ、ネムリグスリヲノミテネムル。ソレデモナカナカネムレズ。芥川ノ顔ガ見エテ仕方ナイ。

59

茂吉は、前述したように、20日に「入院患者の内職的作業」の件で、警視庁より出頭要請があり、その対応に苦慮していた。25日も、朝から警視庁に出頭しなければならなかった。また、21日には、芥川の親友である宇野浩二が、茂吉の世話で滝野川精神病院に入院した。茂吉にとって、緊張の日々のなかで、妻が血相を変えた急報は、病者の逃走や、自殺者という「病院ニ何カ起ツタノデハナイカ」という条件反射とならざるをえない。

25日には「芥川氏ノ追悼文カク 5.自動車ニテ芥川氏ノ家ニ行キ、焼香ス。(略)帳面ニモ名ヲ記サズ。誰ニモアハズニ直グ省線ニテ家ニ帰ル。6.眠グスリヲ調合シノミテヤウヤク眠ル。悲哀ノ心ヲ以テ充タサル」⁶⁰という。26日には「6.芥川氏ノ通夜スルコトヲヤメテ帰宅ス。身心疲労甚ダシ」⁶¹とあり、27日には多忙な時間を割いて「二時少シ過ギニ谷中ノ葬場ニ向フ。」⁶²とある。

芥川の自殺は、茂吉自らが投薬した睡眠剤で自殺したのではと推察し「驚愕倒レンバカリ」であったが、茂吉の当時の状況から推察するに、病院経営の雑務や病者の診療などの忙殺が、その悲哀を忘れさせる程であり、芥川との交流を懐古する余裕すらもなかったと思われる。その思い出を噛みしめるには、もう少しの時間の経過が必要であった。

なお、7月26日付「東京日日新聞」の「精神病院長七名取調べ」の紙面に、「位牌は勿論 墓碑も俗名自殺した芥川氏の通夜に しめやかな文壇人」とある。また、28日付の「患者優遇を申出る」の紙面には、「いたましい未亡人と遺児 けふ芥川龍之介氏の告別式」の見出しと遺族らの写真がある。

芥川は『或旧友へ送る手記』と題された遺書を久米正雄宛に残した。7月25日の新聞各紙に発表された。

誰もが自殺者自身の心理をありのままに書いたものはない。それは自殺者の自尊心や或は彼自身に対する心理的興味の不足によるものである

う。僕は君に送る最後の手紙の中に、はっきりこの心理を伝えたいと思っている。(略)生活難とか、病苦とか、或は又精神的苦痛とか、いろいろの自殺の動機を発見するであろう。しかし僕の経験によれば、それは動機の全部ではない。のみならず大抵は動機に至る道程を示してあるだけである。(略)それは少なくとも僕の場合は唯ぼんやりした不安である。何か僕の将来に対する唯ぼんやりした不安である。君は或は僕の言葉を信用することは出来ないであろう。しかし十年間の僕の経験は僕に近い人々の僕に境遇にいない限り、僕の言葉は風の中の歌のように消えることを教えている。従って僕は君を咎めない。・・・(略)

僕の今住んでいるのは氷のような澄み渡った、病的な神経の世界である。僕はゆうべ或売笑婦と一しょに彼女の賃金(!)の話をし、しみじみ「生きる為に生きている」我々人間の哀れさを感じた。若しみずから甘んじて永久の眠りにはいることが出来れば、我々自身の為に、幸福でないまでも平和であるに違いない。しかし僕のいつ敢然と自殺できるかは疑問である。唯自然はこう云う僕にいつもよりも一層美しい。君は自然の美しいものを愛し、しかも自殺しようとする僕の矛盾を笑うであろう。けれども自然の美しいのは僕の末期の目に映るからである。⁶³

芥川は「唯ぼんやりした不安」という言葉を残して自殺した。また、遺稿として発表された『歯車』には、青山脳病院と思われる病院が描かれている。

「ああ、あすこ？まだ体の具合は悪いの？」

「やっぱり薬ばかり飲んでゐる。睡眠薬だけでも大変だよ。ヴェロナアル、ノイロナアル、トリオナル、ヌマル・・・」(略)

「そのうちに僕は縁起の好い緑いろの車をみつけ、兎に角青山の墓地に近い精神病院へ出かけることにした。」⁶⁴

茂吉が、『或旧友へ送る手記』や『歯車』を読んだかどうかの詮索は不問にする。ただ、精神病医として、芥川の自殺に対し、茂吉の呵責の度合いを付度する資料は乏しいが、茂吉も病院再建や院長就任な

どの煩雑な事案に労苦を重ねたため、不眠に悩まされ睡眠剤を常用していた。医者と病者という構図ではあるが、共に病者であるとも言えるのである。なお、茂吉は芥川へ「澄江堂の主をとむらふ」と前書きして、次の挽歌を捧げた。

夜ふけてねむり死なむとせし君の心はつひに氷のごとし
壁に来て草かげろふはすがり居り透きとほりたる羽のかなしさ
やうやくに老いづくわれや八月の蒸しくる部屋に生きのこり居り

（『ともしび』昭和2年「童馬山房折々」）

「草かげろふ」は生命の儚さの象徴である。また、芥川は死んだが、茂吉は生き残ったという。芥川が35歳で、「やうやくに老いづく」といっている茂吉が、45歳である。

『芥川』という随筆では、次のように芥川の死を回想している。

香川景樹の歌に、『津の国にありとききつつる芥川まことに清きながれなりけり』といふのがある。僕はいつかこの一首を見付けて直ぐ芥川龍之介さんのことを聯想したのであった。（略）そのうち芥川さんは亡くなられてしまった。さて、この歌をおもひおこして口ずさむと、妙に心を引くものがある。旧派歌人の歌ではあるが、芥川龍之介さんの挽歌に出来たもののやうな気がしてならないこともある。⁶⁵

6. まとめ

斎藤紀一が、1928（昭和3）年11月17日に静養先の熱海の福島屋で、心臓麻痺のため68歳で亡くなった。茂吉は講演のため、信濃にいた。院長が茂吉となっても、紀一の存在は大きかった。禅譲ではなく、更迭という形で院長を退いただけに、紀一は進取の精神を依然として持ち続けていた。しかしながら、喘息を病み、風邪をひくことも多く、体調が悪化すると熱海の福島屋で静養するようになった。11月12日には呼吸困難となり、酸素の吸入を行ったが、同月14日になると、熱海へ行き、さらに八丈島で静養する予定であった。茂吉は、養父紀一の死を悼み「籠喪」を歌った。

しづかなる死にもあるかいそがしき劇しき一代おもひいづるに
かぞふれば明治二十九年われ十五歳父三十六歳父斯く若し
休みなき一代のさまを諷れに労働蟻といひしおもほゆ
身みづからこの学のため西方の国に渡り二たび渡りき
今ゆのち子らも孫も元祖（もとつひと）Begründerと称へ行かなむ
おもひ出づる三十年の建設が一夜に燃えてただ虚しかり

（『ともしび』昭和3年「籠喪」）

一代で青山脳病院を築いた創設者（Begründer）であり、国会議員としても華麗な生活を送った激動の紀一であるが、熱海にて一人寂しく静かに息を引き取った。しかし、紀一の「死亡通知書」は、後藤新平伯爵の名を拝借し出された。

父青山脳病院顧問ドクトル斎藤紀一儀熱海に於て病氣療養中の処養生相不叶十一月十七日午後三時死去仕り候間此段御通知申上候⁶⁶

また、茂吉は養父紀一に相応しい葬儀を演出した。12月6日の三七日忌には、呉秀三をはじめと精神医学界の重鎮が参列した。青山脳病院は、紀一の死により、大きな精神的な支柱を喪失した。院長を退いたとはいえ、院代をはじめ病院の多くの医者や職員は、紀一に長く仕えた人たちであった。紀一亡き後、茂吉にはさらなる試練が待ち構えていた。

さて、茂吉が、院長として病院経営に携わり苦悩する姿をたどってきたが、病者とどのように接し、治療をしていたのであろうか。日記には、「午前中診察ニ従事スル」とあるだけで、その内容は不詳である。守屋誠二郎は、「病院長時代」で、茂吉の診察ぶりを「精神科の診察には、長時間かかるが、特に院長は、親切丁寧だった。患者の訴えを一々うなづいて聞き入れられ、解り易い指導をなさるので、院長の診察日を楽しみに待つ居る方が多かった。」⁶⁷という。また、茂吉の長男茂太が、茂吉から引き継ぎ診察した老婦人の話がある。

主訴は、胸騒ぎと心悸亢進であったというが、父の診察ぶりはこんなふうであったということ

だ。「おうおう、このお寒いのによくいらっしやいましたな」などと父は言ったそうである。そして、患者の胸にあてた聴診器の一端を患者の耳にさしこんで、「ほら、こんなにいい音がしていますよ、これならご安心ですなあ」と父は言ったそうである。これが事実ならば、毎日、父の「かみなり」に恐れおののいた私共家族にとっては、まさに信じられぬほどの驚きである。そのいとも「やさしき」父が堀一つへだてた自宅に帰って来ると、たちまちにして「かみなり」を落とすのであった。⁶⁸

茂吉が、少なくとも病者の前では、怒りを抑圧し、辛抱強く診察に当たっていたことは、少ない資料からも伝わってくる。おそらく、紀一の臨床を継承しようとしたように感ずる。この頃は、精神科の治療に訪れることは、本人や家族にとっても勇気がいることで、恥辱であり、世間に秘匿する行為であった。この時代精神を見逃すならば、筆舌に尽くし難い茂吉の労苦は理解できないであろう。

当時の精神病院は、病者を治療することよりも、隔離し監禁することを優先し、とくに警察による衛生行政では、病者の逃亡を最も危険視したのであった。精神病院は病者のためではなく、社会の安寧秩序のためであった。紀一が更迭され、茂吉が院長になったのも、これが為であり、茂吉も病者が逃走したために、警察へ出頭したのであった。病院は逃走事案があれば、直ちに所轄の警察へ連絡し、病者の確保に努めなければならない。病院にとっては、警察に関わって面倒な事になる前に、病者を捜し出したい。病者にとっては、殺風景な病室に閉じ込められるのではなく、作業療法により病気の改善がのぞまれる。しかし、病者の逃走というリスクが付きまとうのである。

茂吉による精神病院の、あるいは精神病患者へ顕著なる改革は見えてはこないが、その時代精神のなかで、精神病医を生業とし精一杯、誠実に病者と向き合い、病院経営に邁進したことは、紛れもない茂吉の営為であり、心より敬意をはらうものである。しかも、「狂人(ものぐるひ) まもる生業をわれ為(す)れどかりそめごとと人なおもひそ」と歌い、「業余のすさび」と言うが、島木赤彦没後には、再び『アララ

ギ』の編集発行人となり、結果として歌人としての仕事も抜かりはなかったのである。

- ¹ 『斎藤茂吉全集』第29巻、岩波書店、1973年、355ページ。
- ² 同巻、354ページ。
- ³ 同巻、355ページ。
- ⁴ 同巻、356ページ。
- ⁵ 同巻、同ページ。
- ⁶ 長男の茂太は、茂吉が名付けた。茂一と名付けたかったが、恩師呉秀三の令息が茂一であったので遠慮した。後に、茂太の長男は茂一と名付けた。
- ⁷ 同巻、356ページ。
- ⁸ 金子準二(1890～1979)は、東京帝国大学医科大学卒業。犯罪精神病理学を専攻し、警視庁技師となる。精神病患者や精神病院の担当となる。戦後は、日本精神病院協会を設立し、1950年
- ⁹ 同巻、356～357ページ。
- ¹⁰ 同巻、357ページ。
- ¹¹ 同巻、358ページ。
- ¹² 同巻、同ページ。
- ¹³ 同巻、359ページ。
- ¹⁴ 同巻、同ページ。
- ¹⁵ 同巻、同ページ。
- ¹⁶ 同巻、360ページ。
- ¹⁷ 同巻、360～361ページ。
- ¹⁸ 同巻、361ページ。
- ¹⁹ 同巻、同ページ。
- ²⁰ 同巻、362ページ。
- ²¹ 同巻、370ページ。
- ²² 岡田靖雄『精神病医 斎藤茂吉の生涯』思文閣出版、2000年、261～262ページ。
- ²³ 同巻、409ページ。
- ²⁴ 同巻、413ページ。
- ²⁵ 同巻、同ページ。
- ²⁶ 同巻、420ページ。
- ²⁷ 同巻、369ページ。
- ²⁸ 同巻、366ページ。
- ²⁹ 同巻、379ページ。
- ³⁰ 同巻、同ページ。
- ³¹ 同巻、380ページ。
- ³² 同巻、380～381ページ。
- ³³ 同巻、381ページ。
- ³⁴ 同巻、383～384ページ。
- ³⁵ 燕楽軒は、本郷通から菊坂の下り口にあり、精神病院の関係の会合で多く使用された。現在は文京

- 区本郷4丁目37番地である。
- ³⁶ 同巻、385ページ。
- ³⁷ 同巻、385～386ページ。
- ³⁸ 東京日日新聞、昭和2年7月26日夕刊。
- ³⁹ 同新聞、同年同月27日夕刊。
- ⁴⁰ 同巻、446ページ。
- ⁴¹ 岡田靖雄、前掲書、260～261ページ
- ⁴² 同巻、447ページ。
- ⁴³ 同巻、470ページ。
- ⁴⁴ 同巻、同ページ。
- ⁴⁵ 同巻、477ページ。
- ⁴⁶ 『芥川龍之介全集』第6巻、岩波書店、1978年、355ページ。
- ⁴⁷ 1914（大正3）年3月3日に、藤岡武雄は「東大の学生であった芥川が巣鴨病院を見学し、さらに医科大学で人体解剖を見ている。」とし、「この時に案内した医員が茂吉」で「二人の意識しない対面が偶然行われた」のでは推測している。『斎藤茂吉とその周辺』清水弘文堂、1975年、347ページ。
- ⁴⁸ 第5巻、649ページ。
- ⁴⁹ 第33巻、735～736ページ。
- ⁵⁰ 同巻、748ページ。
- ⁵¹ 『芥川龍之介全集』第11巻、463ページ。
- ⁵² 第33巻、751ページ。
- ⁵³ 第29巻、327ページ。
- ⁵⁴ 第34巻、5～6ページ。
- ⁵⁵ 第29巻、329ページ。
- ⁵⁶ 『芥川龍之介全集』第11巻、497ページ。
- ⁵⁷ 『芥川龍之介全集』同巻、507ページ。
- ⁵⁸ 北杜夫は、「芥川龍之介さんは余計にもっていっちゃって最後の自殺に使った可能性があったかもとぼくは思っていたけど、自殺に使ったのは別の薬だったそうです。」と否定する。斎藤茂太・北杜夫『この父にして—素顔の斎藤茂吉』講談社文庫、1980年、161ページ。
- ⁵⁹ 第29巻、383ページ。
- ⁶⁰ 同巻、384ページ。
- ⁶¹ 同巻、385ページ。
- ⁶² 同巻、同ページ。
- ⁶³ 『芥川龍之介全集』第9巻、275～279ページ。
- ⁶⁴ 『芥川龍之介全集』同巻、137ページ。
- ⁶⁵ 第5巻、677ページ。昭和3年「文藝春秋」2月号に「童馬山房漫筆」として掲載。
- ⁶⁶ 藤岡武雄『新訂版・年譜 斎藤茂吉伝』沖積舎、1987年、281ページ。
- ⁶⁷ 『アララギ 斎藤茂吉追悼号』アララギ発行所、1953年、49ページ。

⁶⁸ 斎藤茂太『茂吉の周辺』中公文庫、1987年、102ページ。

(Received: May 31, 2010)

(Issued in internet Edition: July 1, 2010)